

## 都市と宗教：ドイツにおける世俗化とグローバリゼーション

—— 宗教文化の変容についての一考察 ——

ヤン・マルク・ノッテルマン

### 要 旨

世界宗教と呼ばれる全ての宗教は都市環境の中で生まれた。都市には貧困、異文化の混在など種々の社会的問題が存在し、しかもそうした都市の中には伝道に好都合な人的交流があったからである。事実また、都市の文化は宗教からの種々の影響を受けて成立している。

都市と密接な関わりを持つ宗教は、都市の文化環境の変化に応じて変化せざるを得ないが、こうした宗教の変容を促進する二つの要素として「世俗化」と「グローバリゼーション」が挙げられる。本稿ではドイツのキリスト教および仏教を事例として、それら二要素の諸局面を検討し、都市における宗教の意義について考察する。

さて、今日のドイツには、教会に所属しているにも拘わらず、神による救済や死後の復活など、キリスト教の根本教理を信じていない人の占める割合が大きいという世論調査の結果がある。こうした宗教の世俗化と統計上の矛盾は、すでに200年前から一部の識者によって指摘されており、その原因としては一般に、19世紀の新思潮のためにキリスト教の教理の説得力が失われたこと、産業革命のために教会の社会的統合力が弱化したことなどが考えられている。しかし世俗化の内実を検討すれば、そこには、ほんらい国家が担うべき社会福祉事業の主要部分を教会が担っているという事実もまた含まれていることが明らかとなる。多くの人々は、キリスト教の教理への信仰からは離れているとしても、キリスト教特有の倫理観に基づく福祉システムの確立という点での教会の社会的貢献を評価し、教会への所属をなお維持していると見ることができる。

このことは都市における文化的環境の変化にたいする宗教の「適応性」の表れと解釈しえよう。ところで、ある文化への宗教の適応という見方は、宗教の「グローバリゼーション」現象を考える際にも適用しうる。異文化に生い育った宗教が都市に流入し、多元宗教的状况を形成する場合、宗教の異文化適応の過程が生じるからである。ここでは、ドイツの都市への仏教の流入がその具体的な事例として考察される。ドイツの都市における仏教の普及は、一方では既存のキリスト教との衝突やいわゆる「ピジン宗教」の発生などの問題が生じる可能性を含み持つとはいえ、他方では、生産的な文化間対話が生まれる契機をも実際に提供している。ドイツの仏教教団による社会福祉事業の試みや人々の共同体的社会関係の回復などが後者の例として挙げられよう。

こうして今日の宗教は都市の文化環境の変容に適応して世俗化し、そのグローバリゼーションによって多元宗教的環境が生み出されていく。筆者は、こうした変化のなかで宗教が社会にたいして及ぼす有用な面を重視し、都市における宗教の社会的意義を強調したい。

キーワード：ドイツにおける宗教、世俗化、グローバリゼーション、宗教の適応性、宗教の社会的意義

## 1. 都市文化における宗教

ここでは、ドイツにおける宗教文化の変容について報告をしたい。

まず、「都市文化」というテーマを取り上げた理由についてであるが、宗教というものは都市文化と深いつながりを持っている。その結びつきについて、以下、まず三点述べたい。

まず今日、世界宗教と呼ばれる全ての宗教は、すでに都市というものに特徴づけられている社会環境の中で生まれたものである。

1) 釈迦、イエス、ムハンマド（マホメット）が育った町には、さまざまな社会的な問題があった。貧しい人々、金持ち、様々な人種（例えばユダヤ人、ローマ人、サマリア人など）が一緒に暮らしていた。多くの人々は、想像を絶する困窮の中で生きていたと思われる。いずれの宗教の創始者も、都市を離れてジャングル、あるいは砂漠へ向かったが、彼らの頭から都市の社会問題は離れなかったに違いない。宗教の創始者たちは、孤独の中で新しい教えを見だし、その後、都市、あるいは都市の周辺に戻っていく。宗教は、都市文化の基盤の上に生じたものであると言うことができるだろう。それゆえ、宗教の中には、多くの人にとって妥当な倫理観が認められるのである。

2) 次に、宗教は都市において広まったという点が挙げられる。先述の通り、どの宗教の創始者も、晩年は、都市（または都市の周辺）で過ごした。これは、彼らの弟子たちにも当てはまる。新約聖書の最も古い部分はパウロの使徒書簡とされているが、その書簡の宛先がローマ、エフェソス、テサロニキにある教団であるという事実は偶然ではないと言えよう。「都市の外での伝道は、現実的ではない」ことをパウロは十分認識していたと思われる。

都市が初期段階にある宗教の拠点になった理由としては、以下の三つの点が挙げられる。

- (1) 都市にのみ、わずかな人数ではあっても、教団を形成し得る程度の数の人々が住んでいた。
- (2) 都市でのみ、パウロのようなよそ者の説教師でも、臨時の仕事で生計を立てることができた。

(3) 都市でのみ、宗教を広めるのに重要な「人々の交流」の可能性があった。

指摘しておきたいのは、人里離れた修道院や寺院、田舎にあるミッション・スクールなどが、伝道において何の役割も演じなかったわけではないという点である。宗教集団が都市を離れたのは、それらがすでに都市社会で強い勢力を得たあとのことである。具体的にいえば、モンテ・カシーノ修道院の設立は、キリスト教教団がローマで勢力を得た後のことであつたし、比叡山延暦寺の建立は、仏教が奈良で勢力を得た後のことであつた。

3) 第三に、都市の文化は元来、宗教的なものであつて、今なお、ある程度宗教から影響を受けているという点が挙げられる。チベットの文化に関心を持てば、演劇から医学に至るまで、文化のどこにでも、仏教が直接的、間接的に影響を与えていることにすぐに気がつくことだろう。北ヨーロッパでも、ルネッサンスに至るまでは、同じような状態であつた。中世の宗教文化をあらわす大聖堂が、ドイツでは町の象徴になっていることが多いことはあらためて言うまでもない。

もちろん、今では状況は変わっている。現在のドイツでは、新しい教会が建てられることはほとんどない。しかし、キリスト教の教会は、今もなお都市の文化に大きな影響力を持っていると言える。現在の教会は、幼稚園、病院、老人ホーム、大学を運営しており、キリスト教の青年団体、婦人会、合唱団も存在する。また、EUのほとんどの国には、「キリスト教」の政党が存在する。ドイツの場合、「キリスト教民主同盟」（CDU）という政党がある。宗教が都市の文化に対して影響力を失ったわけではなく、今日もなお、都市文化と宗教文化とは切り離せないものなのである。

## 2. ドイツの宗教に関する世論調査

ところで、ドイツ人は、一体何を信じているのだろうか。

ゲーテは、1813年1月6日付のヤコービ宛の手紙の中で、次のように述べている。「私は詩人や芸術家としては多神教徒、自然研究者としては汎神論者、倫理観を持つ人間としてはキリスト教徒です。」

彼の答えは非常に「うまい」のだが、一般のドイツ人には、こうしたアンケートには、もっと単純に答えてほしいところである。

さて、私は宗教について、都市文化と関係する限りで考察してみたいので、ここでは大衆現象としての宗教だけを取り扱う。したがって以下においては、経験的な方法 (empirical method) を採り、統計やアンケートの結果を分析することにする。

ゲーテのように、一個人の中に非常に多面的な信仰があることや、宗教の歴史上、教理の発展が大切であることを認めないわけではない。しかし、教理の発展や個人的な意見などに関しては、ここでは、大衆の信仰に影響を及ぼす部分に限って取り扱うことにする。

ドイツの宗教に関する学術的な世論調査は、驚くほど少ないと言ってよいだろう。宗教学は、文化人類学では標準的な手法であるフィールドワークを今まで全く無視してきたのではないかとさえ思われるほどである。しかし、アレンスバッハ・インスティテュートという著名なドイツの世論調査研究所が、1984年以来、宗教に関する世論調査の結果を発表している。

表1を参照されたい。ここで提示されているアンケートの結果よりも正確な統計、すなわち様々な教会に所属する信徒数についての正確な統計があるにはあるが、その統計では、西ドイツと東ドイツの格差などは、全くわからない。また、この表の中の数には、1～2%の誤差があると思われる。こうしたアンケートの結果は、小さな数が事実を正確に反映しないという傾向がある。特に「その他」という欄は、現実とは全く違った印象を与える。例えば、ドイツに住

んでいるトルコ人は、192万人（人口の2.3%）であるが、そのうちドイツ国籍を持たない人の数はこの表にはあらわれない。表1とは異なって、1990年から2001年にかけて、キリスト教以外の宗派の割合が増大したことには疑いの余地がない。

このアンケート結果にはこうした欠陥があるが、ドイツにおける宗教面での変化は見て取ることができる。ドイツでは元来、福音派（プロテスタント）が多数派であったが、現在はプロテスタントとカトリックがほぼ同数、それぞれ人口の約4割となっている。2001年以降になると、カトリックの信徒数はプロテスタントの信徒数よりも多くなるが、その原因はここ数年間、福音派からの離脱率がカトリックからの離脱率よりも高かったからである。また、旧東ドイツと旧西ドイツを宗教の面で比べると、相違は明らかである。西ドイツでは人口の8割以上がキリスト教徒であるのに対して、東ドイツではキリスト教徒の割合は3割以下に過ぎない。これは疑いもなく東欧諸国における宗教政策によって引き起こされた結果であり、政治政策が宗教に大きな影響を与えることを明確に示している。西ドイツでは人口の約20%が教会から離脱しているが、東ドイツでは人口の半数がすでに無宗教の家族の中で育っている。なお、キリスト教徒は、西ヨーロッパ諸国で常に圧倒的な多数派ではない。東欧諸国以外にも、例えばオランダでは、数百年にわたる世俗主義的な政治の中で、東ドイツと同様に無宗教の人が非常に多い。

東欧諸国の政策が、単にキリスト教会の組織構造を壊したのか、それとも旧東ドイツの人々は旧西ドイツの人々と異なる信仰をもっているのか、という疑問は興味深いものである。この点に関して、アレンスバッハ・インスティテュートのもう一つの世論調査に言及したい。

表2を参照されたい。この世論調査によると、東ドイツの人は宗教に対して、西ドイツの人とは異なった態度をとっている。別の調査によれば、旧東ドイツでは、宗教教育を実施しなかったことが原因で、キリスト教に関する知識が大幅に減じている。ルターの故郷で神の存在を信じる人が4人に1人、死者の復活を信じている人が10人に1人というのには、40年間にわたる東ドイツの政策以外に、もっと深い理由があるはずである。

さて、西ドイツの場合でも、教会の重要な教

表1

		西ドイツ		東ドイツ	
		1990年	2001年	1990年	2001年
メ あ ん バ ー 宗 派 で あ る の	福 音 派 (プロテスタント)	43	41	25	23
	カトリック	42	39	6	4
	そ の 他	2	1	1	1
脱 会 し た		10	15	28	22
常 派 に 無 宗 徒 だ っ た		3	4	40	50
合 計		100	100	100	100

表2

何を信じるか (2001年11月)	ドイツ	西ドイツ	東ドイツ	フランス	米国
霊魂	70	77	43	51	90
神の存在	61	71	25	52	94
死後の世界	40	46	15	34	71
死者の復活	29	33	10	20	58
輪廻	18	21	10	23	28
地獄	12	13	6	21	71

理に対する反発は、大衆現象として新しいことではない。アレンスパッハ・インスティテュートの世論調査によると、死後の復活を信じる人の率は、1956年にすでにわずか42%だった。2001年には47%まで上昇しているが、この増加の原因は、おそらく社会の高齢化にあると思われる。

2001年に行われたアンケートで最も注目すべき結果は、ドイツ人の61%しか神の存在を信じていないにもかかわらず、81%もの人々がキリスト教教会に所属しているという点である。キリストの復活、すなわち死者の復活は、キリスト教の根本教理の一つであるにもかかわらず、それを信じる人は30%以下に過ぎない。ちなみにアメリカでは、その2倍もの人が死者の復活を信じている（宗教という観点からすれば、ドイツ再統一によって、ドイツとアメリカの距離は広がった）。

ドイツにおいて、キリスト教教会に属する人が多いのに、信仰をもつ人が少ないということには、どのような原因があるのだろうか。キリスト教の教義への信仰が弱いにも拘わらず、キリスト教教会が組織として相変わらず強いのはなぜだろうか。そもそも、神の存在を信じない人々が、なぜ依然として教会に所属しているのだろうか。聖職者たちは「現代人は日常生活の忙しさのために神のことを忘れてしまった」と嘆いているが、神の存在を信じることも忘れてしまうことができるのだろうか。

### 3. ドイツにおける世俗化の経過

世論調査の矛盾した結果を理解するには、宗教の世俗化がドイツにおいて200年前からどの

ように進展してきたかを詳しく分析しなければならない。

歴史学者トーマス・ニッパダイは『宗教の変革 1870年～1918年のドイツ』という本で次のように書いている。すなわち「(1870年から1918年の間に) ドイツ人の大多数はキリスト教徒であることをやめたか、少なくとも(教会に属していながら) 自分自身をキリスト教徒として意識しなくなったのである。こうした現象は、現在のように目に見えて明らかなものではなかったけれども、1815年から1850年の時点と比較すると、そうした意識の変遷はすでに進んでいた」。

当時の社会で徐々に明らかになりつつあったキリスト教信仰の弱体化には、重要な意味を持つ二つの要因があった。

- (1) 19世紀に起こった思想の潮流のため、キリスト教の教義の説得力が失われていった。
- (2) 教会が社会的な統合力を失った。

キリスト教信仰からの精神的な解放は、19世紀の知識人の著作によく見られる。ニッパダイは、その例として、ダビッド・フリードリヒ・シュトラウス(1808-1874)、フリードリヒ・ニーチェ(1844-1900)、エルンスト・ヘッケル(1834-1919)などに言及している。シュトラウスは、『イエスの生涯』(1837)の中で、「われわれ現代人はもはやキリスト教徒ではない。ラプラスやダーウインの理論に従い、一元的に因果律に基づいて、この世界は無限の物質の進化であると考えなければならない」と述べている。ニーチェとヘッケルは、異なった方法で「キリスト教から開放された倫理(エトス)」を求めたが、彼らの見解は、シュトラウスの見解よりもなおラジカルなものであった。そうした知識人たちの著作は、キリスト教に対する意識の変化の兆しであったが、しかし大衆の意識の変化そのものに大きな影響を与えることはなかったと思われる。エルンスト・ヘッケルの『世界の謎』(1899)は当時のベストセラーとなったが、それでも恐らく、同時期に出版されたキリスト教の祈祷書(1900頃)の発行部数の方が多かったと思われる。

教会が社会的な統合力を失った理由は、イギリスより数十年遅れて始まった産業革命にある。その時、多くの農民が、工業労働者になるために故郷を離れ、都市に移動した。ルール地

域では、多くの村がわずか数十年の間に大都市になり、ベルリンなどの大都市の周縁には、労働者のための郊外住宅地域が造られた。18世紀の末まで、ウェストファリア条約に基づく「Cuius regio, eius religio（領邦君主が教会宗派を決める）」という古い原則が効力を持っており、その結果、地方の居住者は、皆同じ宗派に所属していた。しかしナポレオン時代に、この原則は廃止され、19世紀の半ばになると、異なった宗派の信者が同じ地方に住むようになった。

この変化を具体的に説明するために、ドイツでの事例を見てみよう。ドイツ語に「Gemeinde」という言葉がある。この言葉は、形容詞「gemeinsam（共同、共通）」と同系であり、現在のドイツ語では、二つの意味で使われている。第一の意味は、「教区」あるいは「教区民」という意味で、第二の意味は、「地方自治体」という意味である。18世紀まで、この二つの意味は内容的に殆ど同じだった。教会の規則や教会の催しが、人々にとって日常生活の枠組みでもあった。人々は教会の祝祭を共同で執り行うだけでなく、毎週日曜日に教会に集まり、讃美歌を歌い、その後で地方政治について話したりしたと思われる。こうした社会的なつながりは、大都市の労働者たちには失われてしまった。労働者たちは、教会との関係を失ったのである。1880年のポーfumでは、礼拝への出席率は10%程度で、1879年のベルリンでは2%に過ぎなかった。

教会関係者はこの問題にいち早く気づき、労働者たちとの繋がりを取り戻そうとした。ヨハン・ヘンリヒ・ヴィッヒヤーン牧師(1808-1881)は、社会問題の原因は人々がキリスト教に背を向けているためだと思っていた（実際は逆だった）。彼は、「インネレ・ミッシオン」（キリスト教圏内伝道会）というキリスト教社会事業団を設立し、病院、老人ホーム、日曜学校、託児所などを設立した。この組織の目的は、慈善事業をとおして貧困階層にもキリスト教の価値を伝えることだった。カトリックのフォン・ケッテラー司教は、『労働者問題とキリスト教』という本の中で同様の考えを主張している。

よく知られているように、ビスマルクは社会問題の解決のために社会保障制度を取り入れたが、その取り組みは遅く、問題の財政的な面を

解決したに過ぎなかった。病人、老人、身体障害者のケアを実際に担う教会の施設の重要性は明らかである。19世紀には、個人の福祉や安全は家族の手に負えなくなり、それらを保証する医療施設などの設立は当時の教会の大きな功績であった。もちろん、キリスト教は、当初から隣人愛に基づく慈善事業に大きな役割を果たしていたが、19世紀以降には、そうした事業の規模が変わったと言える。19世紀の病院を中世の修道院の病室と比べると、工場と自宅の小さな作業場のような違いがある。

ヨーロッパ連合の多くの国にあるキリスト教の政党は、そうした19世紀の状況に起源をもつ。ドイツではまずキリスト教の労働者同盟、その後キリスト教の労働組合が発生した。ビスマルクによる教会との文化闘争の結果、カトリック教会側に「ツェントルム（中央）」というキリスト教社会党が生まれることとなった。

1933年7月20日にバチカンとドイツ帝国の間に結ばれた「コンコルダート」（教皇庁と国家との間の合意）は教会史上、重要な出来事だった。ヒトラー政権下で初めての国際的条約の一つである「コンコルダート」は、国家が教会へのそれ以上の介入をひかえるというものだった。それは国家による教会の世俗化の放棄を意味した。

例えば、第13条には、教会は依然として、公法上の法人（eine Körperschaft des öffentlichen Rechts）であり、したがって教会税を徴収する権利を持つことが謳われている。

また、第17条によって、教会のあらゆる施設は、教会に属すること、したがって、教会所有の病院などは、国有化されないことが定められている。

また、第21条～第24条によって、宗教教育を公立学校で行うことが認められている。

この「コンコルダート」がなぜ締結されたかということをごここで扱う余裕はないが、この合意の効力は、今日もなお続いている。この合意は、教会がドイツのとりわけ福祉制度において重要な役割を果たす上での法的な根拠となっている。

ドイツ連邦共和国（BRD）建国直後（1950）、ボンにおいて連邦自由福祉事業連合会が設立された。その組織は六つの福祉事業団体の連合であり、そのうちで現在最も大きな福祉団体は、ドイツ・プロテスタント教会の「ディアコーニー団体」（社会奉仕団）とカトリック教会の「カ

リタス団体」（ラテン語で慈善という）である。自由福祉団体というのは、国家から独立した福祉団体という意味で、ドイツ連邦共和国の福祉サービスにおいて、公的なサービスよりも優先的な扱いを受けている。すなわち、国家は自由福祉団体の施設に多額の補助金を給付しており、国立の福祉施設は、自由福祉団体の施設の収容力が足りない場合にのみ建てられている。

連邦自由福祉事業連合会は、西ドイツで、1984年1月1日には、約6万5百ヶ所の施設を運営しており、施設には約230万人の患者を収容するだけのベッドがあった。専任の職員はあわせて65万6千人であり、またその他に、約150万人のボランティアの職員がいたと推測されている。自由福祉団体の医療施設の3分の2はカリタス団体あるいはディアコーニー団体に所属しており、この2つの団体が52万8千人を雇用していた。また、そうしたキリスト教福祉団体は、ソーシャルケースワークや看護の業務を勉強できる1200の職業訓練所を運営しており、さらに失業者、難民、中毒患者、ホームレス、更正保護の相談所や看護所も数百ヶ所運営している。カリタス団体とディアコーニー団体の外来診療は、病院、青少年ホーム、相談所、文化センターなどと共に、ドイツ中に広く張り巡らされたネットワークを形成しており、言うまでもなく、いかなる信仰を持つ人でもその福祉施設を利用することができる。

ドイツ民主共和国（DDR＝東ドイツ）は、数十年間にわたって反教会政策を実施した。国立学校では宗教教育が廃止され、教会税も廃止され、教会は、資金の調達を寄付金に依存するようになった。国家の青少年団体（FDJ 自由ドイツ青年団）は、反教会のプロパガンダを行い、キリスト教の信者は、社会的に不利な扱いを受けた。それにも拘わらず、東ドイツにも教会の福祉団体は存在していた。ディアコーニー団体は1984年の時点で863（病院、老人ホームなど）の施設を運営していた。こうした理由から、東ドイツは1978年以降、教会に対する関係を見直し、抑圧対策を止めた。教会は東ドイツ国内で、自由な行動を許された場となり、よく知られているとおり、ドイツ民主共和国の解体を速めた一つの要因ともなったのである。

#### 4. 「教会活動の世俗化」から「教義の世俗化」へ

世俗化とは、通常、次のような三つの点で定義される。

- 教会が国家や国家活動に対する影響力を失う。立法、教育制度、メディアなどに影響を与える余地がより狭くなる。
- （礼拝などの）教会の催しに参加する人数が減っていく。
- （個人の生活や社会の文化にとっての）宗教的な規律や宗教的な意味体系の意義が消えていく。

第三章で述べたように、世俗化は、この三点から見れば、すでにかなり進んだ状態にあると言えるだろう。教会の立法、教育制度、メディアに対する影響は、わずかなものである。例えば、現在のドイツの婚姻法は（特にカトリック）教会の考え方をほとんど考慮していない。ギュンター・シェーラーは『世俗化のコンテクストにおける教会』という論文の中で、「福祉事業の分野では、変化の経過はかなり異なっていた」と書いている。言い換えれば、福祉事業の分野では、ある意味で世俗化とは反対のことが起こったのである。教会は今日、150年前には占めていなかった位置を得ている。現在の教会はドイツの福祉事業の50%以上を運営しているのである。「世俗化の反対のこと」とはいえ、じつはこれも世俗化の一種と呼んだほうがいいかもしれない。見方を変えれば、実際このことは教会の活動の世俗化であり、聖職者の活動の世俗化と見做すことができるからである。

ドイツの福祉制度における教会の位置は、近年、とみに批判されるようになった。コンコルダートによって、国家が教会のために課している教会税に対する批判は多くなった。国家が各宗教に対して中立の立場をとるべきであるという原則に違反していると考える人が多いからである。他方、国家が教会の施設に対し、教会税だけでなく、さらに補助金を出しているにも拘わらず、教会の施設の運営に影響力を及ぼすことができないのは不当であるという非難もある。また、看護婦が教会から脱会したために職場を追われるというケースもあった。ドイツでは幼稚園が不足しているため、キリスト教教会に所属していない両親が子供のために適当な幼

稚園を探すのが難しくなっている。

こうした理由から、最近では「コンコルダート」の無効・破棄を要求する政治家もいるが、これは今のところまだありえないだろう。現在、ドイツは高い失業率、高齢化など、非常に大きな問題に直面している。そのため、国は福祉の領域で新しい課題を引き受ける力が全くない。いかにして国がボランティアの人々に動機を持たせることができるだろうか。むしろ逆に、国がアメリカを手本として、(福祉を含めた)さまざまな領域から撤退する可能性さえある。教会の役割は、この先もっと重要になるはずである。国家と教会の協力関係は、この先数十年の間も続いていくと私は思っている。

先に宗教の世俗化の特徴として三点を挙げたが、ここでさらにもう一点付け加えたい。

#### ・大衆にとっての宗教教義自体の世俗化

1900年頃の炭坑の町ボーフムに住む鉱山労働者のことを想像してみよう。彼は、若いころから、年に1回程度は礼拝に参加しても、教会とはほとんど関係なく過ごしてきた。しかし、友人に説得されてカトリック系の労働組合に加入し、数十年間労働条件の改善のために活動していたとしよう。このような労働者は、「キリスト教でもっとも重要なことは何か」という問いにどう答えるだろうか。彼はおそらく「真のキリスト教は礼拝や教義上の信仰等とはほとんど関わりがない」と返答するに違いない。「一番大切なのは、山上の垂訓のようなイエスの言葉だ。例えば『与うるは受くるよりも幸いなり』、『貧しき者は幸いなり』、『汝自身を愛するがごとく隣人を愛せよ』と。

引用した言葉は言うまでもなく道徳上非常に重要なものだが、パウロ以来のキリスト教の本質ではない。キリスト教の根本教理は、イエスの死と復活を中心としたいわゆる「救済の歴史」にほかならない。

先の例で見た鉱山労働者のような人々は、自らをキリスト教徒と考えていたと思われるが、キリスト教自体が世俗化したためにこうした考えが可能となったのである。こうした鉱山労働者のような人々が信じるキリスト教は、もはや救済の宗教ではなく、倫理的な世界観であった。

さて、これでようやく第二章の「キリスト教の根本的な教理を信じない人々が、高い教会税にもかかわらず、今でもなお教会を脱会してい

ないのはなぜか」という問いに答えることができる。

第一に重要な点は、多くの人々の信仰そのものが「世俗化」しているということである。キルケゴールは、19世紀の半ば、復活の教理を認めないキリスト教というものを想像することができなかった。現在のドイツでは、教会に所属する過半数の人が復活を信じてはおらず、しかも彼らはそのことに矛盾を感じていない。教会に所属していながら神のことを信じていない25%の人は、「無神論的キリスト教」を唱えた神学者、ドロテー・セレを引き合いに出すことだろう。

第二に重要な点は、フランツ・クサーバ・カウフマンが『エリート階層の倫理と宗教』という本で実証しているように、「功利主義的な教会観」が広がっているということである。先に述べた現在の教会の社会的な機能を考えてみれば、この点は驚くに値しない。ドイツのエリート階層も、教会の教えを指針とすることがほとんどないにも拘わらず、アンケートによるとエリート階層の67%が神を信じることを表明している。「宗教は人間にとって必要なものであるから、社会上重要なものである」とエリート階層の80%の人が考えており、57%が「教会は、ほんらい国家が担うべき機能を受け持っているから重要である」と考えている。

エリート階層の人々だけでなく一般の人々も教会が社会福祉において重要な役割を演じていることを認めるはずである。教会は社会に大きな利益をもたらしており、社会の仕組みを安定させている。教会による社会的な貢献、特に福祉システムにおける貢献を認めているがために、教会から脱会しない人々も少なくないのである。

こうした功利主義的な教会観には、宗教の立場から見れば、悪い面もある。教会が社会的な活動を行うことによって、そうした活動自体が、政治的な色彩を帯びてしまい、特にプロテスタントの場合に顕著なことだが、教会に所属することがある種の政党に所属するかのようになってしまうのである。皮肉めいた言い方をすれば、原子力や遺伝子工学に反対する人、環境保護論者、イラク戦争に反対する人などはプロテスタント教会から脱会しないほうが良いということになる。

結局のところ、今日、キリスト教は隣人愛や



弱者の扶助を強調している。このようにキリスト教の活動は非常に具体的なものであるが、もっぱら社会的倫理と誤解され、宗教上根本的な教理を失ってしまう危険にさらされているのである。

## 5. 異文化の宗教の普及とその危険

これまで、ドイツの伝統的な宗教であるキリスト教がおかれている状況について述べてきた。ドイツは今日、世俗化された国であると言って過言ではない。国家の立法によってのみならず人々の考え方によっても、外国の宗教の普及が可能となった。グローバリゼーションは宗教にどのような影響を及ぼすだろうか。また、ドイツは多元宗教的な社会になるだろうか。次にこのような問題を取り上げたい。

文化人類学者ブルクハート・グラティゴフは、『文化における宗教 宗教における文化』という論文の中で、宗教と文化の関係を説明するために「相応性」という興味深い概念を導入している。「相応性」というのは、ある宗教がある文化にとってどの程度相性がいいか、どの程度ふさわしいか、ということである。「違う場所、違う文化で存在する宗教 (displaced religions) があるのか」というふうに、グラティゴフは挑発的な質問を投げかけている。

私は、グラティゴフの考えを深めて、宗教の「相応性」というより、宗教の「適応性」という概念を使いたい。生物の進化があるように、思想の発展、または人間のアイディアの発展の歴史というものがあろう。進化論では、自然的環境が変わるにつれて、生物も異なった条件に適応しなくてはならないとされる。生物が新しい生活圏を開拓するときも、その環境条件に適応する必要がある。われわれ人間が住む文化的環境も常に変化している。その結果、宗教などの文化的システムも常に変化に適応する必要があるのである。そのことは、宗教の根本的な教義を変更しなければならないということの意味しているわけではない。ただ、教え方や社会的な活動は、変わらなければならない。先に説明した世俗化の経過も、社会環境の変化に対するキリスト教の適応の過程として解釈しうる。自然科学の発展と産業革命によって、キリスト教の外見はまったく変わったということができ

るだろう。

ある宗教は、異文化に受容された場合、その文化の環境に適応しなければならない。ヘレニズム文化圏に入ったキリスト教ならびに日本に入った仏教は、その地の文化に適応して栄えた。現在ドイツに入っているイスラム教や仏教も、現在のドイツ社会に適応しなければならないことは言うまでもない。

普及のしかたに応じて、受容される宗教は次のように分類することができる。

1. 専ら信者の移住によって普及する宗教
2. 専ら土地の住人が改宗することによって普及する宗教

移住によって普及するというのは、他国からの移住が大規模であるため、移住民が社会的にある程度独立したグループを形成して二世、三世に自分の宗教を受け継がせる可能性があるというケースである。例を挙げるなら、ドイツではイスラム教がそうした宗教にあたる。現在ドイツに住むイスラム教徒の数は既に330万人（全人口の4%）にのぼり、そのうち192万人はトルコ出身である。今までドイツ国籍を得たイスラム教徒は73万2千人に過ぎないが、イスラム教がすでにドイツに根を下ろしていることは疑うまでもない。ほとんどの大都市の郊外にはモスクがある。トルコがEUに加入すれば、ドイツにいるイスラム教徒の人数はさらに増加すると予想されている。

専らドイツ人自身が改宗することで普及しつつある宗教の例は仏教である（仏教以外の例はほとんどない）。信者の数を比較すれば、ドイツの仏教徒はドイツのイスラム教徒よりはるかに下回り、21万人程度である。そのうち、仏教国出身の移住者は11万人（その内訳は、タイ出身が6万人、ベトナム出身は2万5千人）で、ドイツ出身の仏教徒（言い換えれば仏教団体に所属する人々）が10万人である。それはドイツの総人口の0.25%で、割合としては少ないものの、無視できない数である。ドイツ人仏教徒の数は戦後、指数関数的に増加しつつある。1945年に2千5百人に過ぎなかった仏教徒は、現在、10万人にまで増大している。

地図1に見られるように、仏教団体は全国に均等に拡散しているわけではなく、大都市に集中している。移住民が多い地域との相関関係は認められない（例えばフライブルクには、仏教国からの移住者は少ないにも拘わらず、仏教団



地図1 ドイツにおける仏教団体



体が多い)。このことから、ドイツにおける仏教の普及は、移住とはほとんど関係がないことが分かる。また、ドイツ人は、現在、ベトナム仏教ではなく、チベット仏教、日本の禅宗、スリランカの小乗仏教といった宗派に関心を抱いている。

伝統的な文化の立場からすれば、異文化の宗教を受け入れるということには困難が伴い、危険なことさえある、ということになる。その際、伝統的な文化への適応の拒否という危険が生じる。また、英語と現地語の混合言語は「ピジン英語」と呼ばれるが、宗教の受容の際にも「ピジン宗教」とでも言うべき堕落した混合宗教が発生する危険もある。

移住者によって信徒の数が増えるイスラム教にとって、現地の文化への適応拒否ということが最も危険な点である。移住者の多くは、宗教を文化的なアイデンティティの象徴と考える。移住者によって広まる宗教の価値や規則などが国の社会的な規定やルールと強く矛盾する場合、問題が起こる可能性が生じるのである。そ

れは「文明の衝突」と呼ばれることもあるが、私はそういった考え方を拒否したい。とはいえ、一国の文化が二分されて、二つの文明間の対話が難しくなる危険というものは実際に存在する。60年代から外国人労働者としてドイツにきたトルコ人は同時に入国したイタリア人やギリシア人ほど一般社会へ吸収・同化されていないことが指摘されている。その背景には、言語の問題ばかりではなく、宗教的な問題も原因として伏在しているのである。

「ピジン宗教」とは、次のような意味である。例えば、外国語をマスターする時に、最初は簡単な挨拶から始めて、次第に難しい表現が使えるようになるように、人は、宗教面においても、そうした成熟のプロセスを経ていく。人は、様々な宗教的な教えや哲学的な考えなどを知ることによって、それを受け入れるにせよ捨て去るにせよ、その内面に徐々に成熟した宗教観あるいは世界観を形成していくのである。しかし、我々が21世紀において目にする宗教の教えは、多くの人の目には、あまりにも互いかけ離れているように映り、断片のみを理解して混乱してしまう場合も少なくない。そのように、自分の文化、宗教を「読めない」、ある意味で「宗教的に文盲」である人も出てこよう。カトリックからイスラム教のスーフィー教徒になって、のちに仏教を試し、最後に統一教会の教えに従うようになった、などという宗教遍歴は、気まぐれで少々変わった人に典型的な症候だといえよう。そういう「ピジン宗教」は個人的なものである以上、ほとんどの場合、社会の障害となることはない。しかし、そうした「ピジン宗教」が、社会にとって非常に危険な存在となるケースも存在した。日本人にとってオウム真理教の事件は記憶に新しいだろう。

## 6. 宗教のグローバリゼーションの例としてのドイツの仏教

グローバリゼーションの流れは、宗教をも呑み込んでいる。現代の人々は、外国人と知り合うことやメディアや旅行を通して、今まで馴染みのなかった宗教を知るようになった。どの宗教についてもインターネットで詳しい情報を見つけることができるため、宗教に興味を持つ人は、様々な宗教について調べることが可能であ

る。現在、世界の宗教をすべて比較して、良いところ、悪いところを判断する機会があり、特定の宗教に所属するか否かを誰でも自分で決めることができるようになってきている。

しかし、馴染みのない宗教についての関心は、一様ではない。例えばドイツでは、どの駅の本屋でもドライ・ラマの本を見つけることができるのに対して、コーランの説教者の本を見かけることはほとんどない。

異文化の宗教を受容するために必要な条件の一つは、今までの思想に似ているところ、つながる点があるということだろう。たとえば、キリスト教がヘレニズム文化圏に受容されるより以前には、キリスト教の復活信仰に相当する魂の永遠性を説くギリシャの哲学者がいた。今や西洋で徐々に普及しつつある仏教には、西洋思想とのそうした結合点があるだろうか。

19世紀の始めからキリスト教を批判する声が高くなる一方で、インド思想が、ドイツ人の学者達の関心の的となった。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、1825年から1827年にかけて『バガバッドギーター』についての研究を発表し、その詩を熱狂的に賞賛した。その後、サンスクリット語研究が流行し、プロイセン王もサンスクリット語を学んだと言われている。アルテュール・ショーペンハウアーも若いころ『ウパニシャッド』の翻訳を読んでいた。もっとも、主著である『意志と表象としての世界』を書いたときに仏教に関する知識を持っていたかどうかは、依然として意見の分かれるところである。しかしいづれにせよ、老ショーペンハウアーは「私は仏教徒だ」と公言してはばからず、居間には金箔を貼った仏像を安置していたことが知られている。

実際、インド仏教とショーペンハウアーの哲学の間には類似点がある。よく知られている通り、初期仏教は、心の煩悩が全く消えた状態を目標としており、それを涅槃（ニルヴァーナ）と呼んでいる。ショーペンハウアーが「盲目的意志の否定」を求めることは、涅槃を求めることと同じではないか。ショーペンハウアーが、キリスト教よりも仏教を高く評価した理由は、次のようなものであった。

1. 仏教は無からの天地創造のかわりに、絶え間ない因果性を説いている。
2. 仏教は全能の神への信仰を拒否している（とくに神は位格＝ペルソナであるという考え

をショーペンハウアーは厳しく批判した）。

1. 19世紀以降、キリスト教の天地創造説は、ほとんどのドイツ人にとって信じ難いものとなっている。それは、聖書の創造神話が自然科学の進化理論に矛盾するばかりでなく、世界の創造以前の虚無と虚無からの世界の創造については、どのように考えられるべきか、因果の原理に反しているのではないかと、いった哲学的な問題が向けられるようになったためである。一方、仏教は、因果については初めから、間断のない（無始の）因果の連鎖なるものを主張している。仏教の因果についての思想には倫理的な面も含まれるため、自然科学の因果関係とは明らかに異なるものの、天地創造説のように、因果の原理に直接に反することはない。
2. 仏教は全能の神への信仰を拒否するため、いわゆるテオディツェー（神議論）の問題に答える必要を有さない。テオディツェーというのはギリシア語に由来する言葉で、「神（テオス）の正義（ディケー）」という意味である。それは大雑把に言えば「全能の神は慈悲深い方であるのに、なぜ世の中には苦しみ、不公平など、悪いことが多いのか」という問いである。テオディツェーの問題は、哲学の問題というより、個々の信者にとっての問いである。

ところで、ドイツ仏教の代表的な人物を調べてみれば、もともとユダヤ教徒であった人が多いことが目に付く。たとえば、有名な翻訳者カール・オイゲン・ノイマン（1865-1915）、ニヤナポーニカ比丘（1901-1994）、アヤ・ケマ比丘尼（1923-1994）などはユダヤの家系の出である。ユダヤ人がなぜ仏教について深い関心を持っているかという理由を探れば、テオディツェーの問題が重大な要因であることが推察される。テオディツェーの問題はユダヤ教にも同じように現れるばかりでなく、ユダヤ人にとって特に深刻なものであったと考えられるからである。

ドイツの仏教徒たちの中では、これらの理由はこれまで重要なものと見做されてきたが、ではなぜ一般のドイツ人が仏教に好感を寄せるのだろうか。

まず、仏教の「再生への信仰」は、キリスト教における「死者の復活」よりも想像しうるものである。実は、キリスト教における「死者の復活」は、日常的には想像し難い教理であるの

に対して、仏教における「再生」は比較的想像しやすい教理である。だれかに「どのように再生するのか」と問えば、「再生というのは、またこの世に生まれることにほかならない。わたしたちはみんな生まれる経験をしたことがある」と答えることができるだろう。このために、再生を信じるドイツ人が多いのかもしれない。アレンスバッハ・インスティテュートのアンケートによれば、27%のドイツ人は「再生はありうる」と述べており、18%のドイツ人が再生を信じているようである。

また、仏教は平和を愛する宗教とされており、仏教の国では大規模の異端者迫害がほとんどなく、宗教戦争も魔女狩りもなかったという点が仏教の良いところとして認められている。

グローバリゼーションの時代に他の文化圏に受容される宗教は、次のような適応の問題に直面している。

- ・ 宗教内の複数主義すなわち多元性 (pluralism)
- ・ その国の伝統的な宗教との対決

宗教内の複数主義 (pluralism) というのは、一つの宗教の内に複数のグループが並存することである。現在、宗教は、長い歴史を経るにつれ、いろいろな宗派に分かれて、さまざまに異なった教義を説いており、内部での統一性がない。ある宗教がグローバリゼーションの下で異文化の環境において普及すれば、がららい地理学的に分かれている宗派が同時に現れる。今日のドイツでは、スリランカの小乗仏教 (テーラバーダ)、韓国の禅宗、浄土真宗、チベット密教などのグループが並存している。すべてのグループは、自派こそが真の仏教の教えを伝えていると主張しているが、一般の人々には宗派の相違はそれほど注目されておらず、仏教は一つの宗教と思われている。

この事態は、これまでのヨーロッパの宗教事情とは全く異なっている。また、日本の状況にもある程度似ているようだが、仔細に見れば全く異なっている。日本の仏教は長い間の発展・経過のおかげで多くの宗派を生み出したが、日本人の大多数は宗教のことを特に考えずに、生涯にわたって実家の宗派に所属している。これに対して、ドイツの仏教徒は大多数がキリスト教あるいは無宗派の家庭に生まれて、大人になってから仏教に帰依する。こうした人々は、

まず仏教のいろいろな宗派に触れてみて、後に特定の宗派への入信を決めている。

- ・ 宗教内の複数主義 (pluralism) を二つの観点から考察する。一つは内的な観点であり、他方は、外的な観点である。

内的な観点に関しては、ある宗派が他の宗派とどのような関係にあるかを探ることが必要である。仏教が盛んな国では、このことはさほど重要な問題ではなかろう。例えば、曹洞宗がチベット仏教とどんな関係にあるのかということは、日本の仏教徒にとって余計な問題であろう。しかし、ドイツでは現実的な問題である。例えば、仏教に深い関心をもっているドイツ人を想像していただきたい。その人は小都市に住んでおり、まず地方にあるチベット仏教のグループに触れた。そのグループの催しに参加し、グループと一緒に瞑想、礼拝するようになった。数年後に近所に曹洞宗の小さい道場が新たに開かれ、その曹洞宗の道場に参禅するようになったとしよう。曹洞宗の立場からすると、その人が今まで修行していた教えにどのような意味があるだろうか。

外的な観点というのは、仏教の中にはいろいろな流れが並存するのに、どのようにしてそれらをまとめて一つの「仏教」として世間に知られることができるかということである。1955年に「ドイツ仏教協会」という組織が設立され、60年代になると改称して「ドイツ仏教連合 (Deutsche Buddhistische Union, DBU)」と名乗るようになった。ドイツ仏教連合は、個々の仏教団体を統合する上部機関としてドイツ連邦共和国で仏教の利益を代表している。

ドイツ仏教連合は、重要な課題を抱えている。一つの仏教団体があるプロジェクトを行うには小さすぎる場合、DBUに他の仏教団体に協力を要請してもらうことができる。しかし、仏教団体は、将来的にも、キリスト教教会のような社会的な位置を得ることはないだろう。それが明らかになったのは1984年のことである。その時、ドイツ仏教連合は、先に述べた「コンコルダート」で保証された利益を得るために「公共法上の法人の位置」を求める申請をした。しかし、ドイツの政府は、二つの理由をもとにその申請を拒否した。一つは、ドイツ仏教連合が統合する団体には、共通の信仰告白 (confession) がないということ。もう一つは、

仏教の信者は全人口の0.6%以下に過ぎないということである。最近、ドイツ仏教連合は共通の信仰告白 (confession) を発表した。仏教は宗派の間での相違が大き過ぎるので、その信仰告白だけでは、統一的な宗教共同体であることを証明しえないことはいうまでもない。

さて、二番目の点、すなわち、普及していく外国の宗教は伝統的な宗教と対決するという点に話を移そう。キリスト教はいろいろな領域で仏教の活動の手本となっていることは明らかである。多くのドイツの仏教徒は、キリスト教教会が運営する福祉施設に大きな関心を示すばかりでなく、同様の施設を設立しようとしており、特にホスピスは関心の的となっている。インターネットの情報によれば、ドイツではすでに仏教徒が運営するホスピスが開設されている。しかし、大きな施設を建てる資金が仏教団体にはなく、そうした計画が立ち消えになってしまうことも多いようである。

他のキリスト教の活動も仏教徒にとって手本とされている。オーストリアでは、宗教教育が国立学校の科目であるが、最近、仏教の授業を受けることも可能となった。ある仏教徒は監獄で教戒師をしており、また相談施設でカウンセリングをするケースもある。たしかに、今のところそれは仏教徒の雑誌でしか読めない個別的な現象にすぎないが、将来性はあると思われる。

さらに、ドイツ仏教連合によって2年ごとに催される仏教徒大会は、キリスト教の教会大会を手本としている。今回の仏教徒大会には2千人が集まり、成功裏に終了した。

最後に指摘しておきたいのは、キリスト教が仏教から学んでいる点もあるということである。宗教的な経験を深めるため、瞑想に興味を持っているキリスト教徒も多い。今日、イエズス会師エノミヤ・ラサルらのおかげで、一般人も一種の座禅を習うことができるキリスト教修道院が出てきている。

## 7. 結 論

ドイツにおける宗教はどのように変化してきたかを知るためのアプローチとして、私は宗教についての世論調査の結果を引用した。そのアンケートの結果を解釈することによって、宗教の変容を促進する要素として、世俗化とグロー

バリゼーションという点を指摘した。まず、世俗化に関して言えば、宗教は影響力を失い、少しずつ宗教の目標が実践的な生活のための活動と見做されるようになった。しかし、世俗化は宗教にとって絶対的にマイナス要素だけではないと思われる。宗教が、自然現象についての迷信や、政治・法律の独善的な影響力を放棄することによってはじめて、人は、宗教の内的な本質に迫る機会を得ることができるようになると思うからである。グローバリゼーションの影響はまだそれほど強くはないが、必ず多くの国で多元宗教的な社会を生み出すことになるだろう。ドイツでは将来キリスト教徒、イスラム教徒、仏教徒、無宗教の人々などが一緒に暮らすことになるだろう。「文明の衝突」というのは全く偏った見方であると思われる。宗教面での「グローバリゼーション」は、多角的で複雑な適応の経過であり、ここでは、ドイツ仏教の例を挙げてその特性の幾つかに言及した。異文化の宗教の並存に問題が起こらないとは言えないが、互いに学びあうことができるのは明らかである。

とどのつまり、宗教は将来、都市文化に対してどのような役割を演じるであろうか。確かに、世俗化によってドイツでも宗教への関心は減少した。具体的に言えば、礼拝の社会的な意味が失せ、日曜礼拝への参加も減った。最近では、教会の売却や取り壊しが報じられることも多くなっている。

結婚式、葬式などの儀式も個人的な事柄とみなされるようになり、もはや社会的な義務ではなくなった。多数の友達をもち、経済的に余裕のある人は、こうした儀式を行うが、このような儀式を省略する人も多い。

しかし物の見方を変えてみよう。礼拝、結婚式、葬式などは典型的な宗教形態の表現であり、これこそ宗教そのものとみなされてきたが、実はこれは慣習に過ぎないとも考えられる。釈尊は葬式に参加したことは伝えられていないし、有名なカナの結婚式には、イエスは神官としてではなく、客として参加している。

宗教について知りたい人々には、礼拝中の説教以外に、多くの機会が与えられている。宗教書を読んだり、文化センターの宗教講座に通ったり、映画によって知識を得ることもできる。

また集団としての体験の機会は、教会での礼拝だけに限られない。そのために特にカトリックと福音派の信徒大会を挙げることができよ

う。それはとりわけ若者の間に人気のある大イベントで、毎年10万人以上が参加している。また、大都市から離れた修道院で行われる瞑想の講座、あるいは巡礼もその例となろう。このような催しに加わり、人と知りあい、友人を得ることもできる。これらは、言うまでもなく宗教的な意味以外に、社会的な意味あいをもっている。つまり宗教的な催しはいつでも社会的な役割を演じてきたのである。これを宗教的でないといふことは当を得ていない。

世界的宗教はいずれも偉大な遺産を守っている。哲学は善の研究にささげられるが、善を実現するための内的な力である希望を人生の最後の瞬間まで与えつづけてくれるのは宗教である。ゆえに、さまざまな変遷にもかかわらず、宗教が将来の社会生活においても重要な側面を占めることは間違いないだろう。

#### 参考文献

- Baadte, Günter und Rauscher, Anton: „Neue Religiosität und säkulare Kultur“ [Kirche heute 2.] Verlag Styria, Graz 1988
- Handley, David: „Die Zukunft der europäischen Christdemokratie“ In: Minkenberg [2003]
- Hecker, Hellmuth: „Lebensbilder deutscher Buddhisten. Ein biographisches Handbuch“ (2 Bde.) [Forschungsberichte Bd. 13] Universität Konstanz, Konstanz 1996
- Helwig, Gisela und Urban, Detlef (Hg.): „Kirchen und Gesellschaft in beiden deutschen Staaten“ Edition Deutschland Archiv, Köln 1987
- Henkel, Reinhard: „Atlas der Kirche und der anderen Religionsgemeinschaften in Deutschland. Eine Religionsgeographie“ W. Kohlhammer, Stuttgart 2001
- Herzog, Roland und Kunst, Hermann (Hg.): „Evangelisches Staatslexikon“ (2 Bde.) Kreuzverlag, Stuttgart 1982
- Hummel, Reinhard: „Kult statt Kirche. Wurzeln und Unterscheidungsformen neuer Religiosität außerhalb und am Rande der Kirchen.“ In: Baadte [1988]
- Hutter, Manfred: „Buddhisten und Hindus im deutschsprachigen Raum“ [Religionswissenschaft Bd. 11] Peter Lang, Frankfurt a. M. 2001
- Kehrer, Günter: „Die Kirchen im Kontext der Säkularisierung“ In: Baadte [1988]
- Kraft, Dieter und Mielenz, Ingrid (Hg.): „Wörterbuch: Soziale Arbeit“ Beltz Verlag, Weinheim 1996
- Kaiser, Johann-Christoph und Döhring-Manteuffel, Anselm (Hg.): „Christentum und politische Verantwortung. Kirchen im Nachkriegsdeutschland.“ [Kommissionsgesellschaft. Beiträge zur Zeitgeschichte, Bd. 2] W. Kohlhammer, Stuttgart 1990
- Kaufmann, Franz-Xaver und Kerber, Walter sowie Zulehner, Paul M.: „Ethos und Religion bei Führungskräften. Eine Studie im Auftrag des Arbeitskreises für Führungskräfte in der Wirtschaft“ Kindt Verlag, München
- Lambert, Heinz und Althammer, Jörg: „Lehrbuch der Sozialpolitik“ Springer Berlin 2001
- Noelle-Neumann, Elisabeth und Köcher, Renate: „Allensbacher Jahrbuch der Demoskopie 1984–1992“, Band 9. „Allensbacher Jahrbuch der Demoskopie 1993–1997“, Band 10. „Allensbacher Jahrbuch der Demoskopie 1998–2002“, Band 11. K.G. Saur, Allensbach bzw. Verlag für Demoskopie, Bonn
- Minkenberg, Michael und Willems, Ulrich (Hg.): „Politik und Religion“ [Politische Vierteljahresschrift Sonderheft 33/2002] Westdeutscher Verlag 2003
- Nipperdey, Thomas: „Religion im Umbruch. Deutschland 1870–1918“ Verlag Beck, München 1988
- Oeckl, Albert: „Taschenbuch des öffentlichen Lebens: Deutschland (2005)“ Festland Verlag, Bonn 2004
- Schopenhauer, Arthur: „Sinologie“ aus: „Über den Willen in der Natur“ In: Sämtliche Werke, Bd. 3 „Einiges über Sanskritliteratur“ aus: „Parerga und Paralipomena“ In: Sämtliche Werke, Bd. 5 Hrsg. v. Wolfgang Frhr. Von Löhneysen Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1989
- Zotz, Volker: „Auf den glückseligen Inseln. Buddhismus in der deutschen Kultur“ Berlin, Theseus 2000

# The City and Religion /Secularization and Globalization in Germany : A Consideration of the Transformation of Religious Culture

Jan Marc NOTTELMANN

All of the religions known as world religions were born in an urban environment. This is because poverty, a host of different cultures and many other social problems exist in cities, and the type of human exchange which is suited to preaching existed in cities. In fact, urban-culture is established through the various influences of religions.

Religions which are closely related to cities have to change with changes in the cultural environment of cities. And “secularization” and “globalization” are two elements that promote these religious changes. This thesis reviews aspects of these two elements by referring to Christianity and Buddhism in Germany as examples, and it examines the significance of religions in cities.

Surveys say that people who don't believe in salvation through God, resurrection after death and other basic doctrines of Christianity even though they belong to churches account for a large percentage in Germany today. This kind of religious secularization and statistical paradox was already being pointed out by some intellectuals from 200 years ago. It is generally considered that this was caused by a loss of persuasiveness in Christian doctrine due to the new climate of thought in the 19th century and the weakness of a unifying power in the society of churches due to the industrial revolution. However, closer examination of secularization reveals the fact that the churches were taking on major areas of social services which had been assumed originally by states. Though many people keep themselves away from a belief in Christian doctrine, they admire the social commitment of churches in establishing social systems based on ethics which are unique to Christianity, and these people continue to belong to churches.

This can be interpreted as a sign of the “adjustability” of religions towards the changes in the cultural environment in cities. This view of the adjustability of religion to a culture can be applied when we consider the phenomenon of “globalization” of religions. This is because the process of religions adapting to a different culture occurs when religions which live and grow in different cultures spread into cities and shape heterogeneous religious situations. In this thesis, the influx of Buddhism in German cities is examined as a detailed example. The spread of Buddhism in German cities possesses the possibility for a clash with the existing Christianity and the break-out of “pidgin religion” on the one hand, but on the other hand, this situation actually hosts an opportunity for productive intercultural talks. The attempts at social services by the Buddhist community in Germany and people's restoration of communal social relationships are examples of the latter.

In this way, today's religions have become secular by adjusting to changes in the cultural environment in cities, and a heterogeneous religious environment is produced by globalization. The author emphasizes religions' valuable aspects for society through the changes as well as the social meanings of religions in cities.

(translated by Kako RICHARDS)

Keywords : religions in Germany, secularization, globalization, adjustability of relations, social meanings of religions